黙示録9章20－21節 「頑なな心の謎」

1A 悔い改めない謎

1B 見聞きしても信じない者

1C 陰府で苦しむ金持ち

2C ラザロを見ても信じない者たち

2B 神の慈しみと寛容の悔り

1C 不信の罪

2C 強情を張る心

3C 固定される心

3B 自ら定める滅び

2A 悪霊に仕える者

1B 悪魔に従う者たち

2B 偶像礼拝

1C 神への悔り

2C 霊的盲目

3B 悪い行い

1C 偶像の表象

2C 霊的自傷

3A 主への立ち返り

1B 覆いの取り除き

2B 神のかたち

本文

黙示録 9 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びが、先週、黙示録 8 章まで来ていますが、午後礼拝で 9 章全体を一節ずつ学びます。今朝は、最後の 2 節、20-21 節に注目します。「[20] これらの災害によって殺されなかった、人間の残りの者たちは、悔い改めて自分たちの手で造った物から離れるということをせず、悪霊どもや、金、銀、銅、石、木で造られた偶像、すなわち見ることも聞くことも歩くこともできないものを、拝み続けた。[21] また彼らは、自分たちが行っている殺人、魔術、淫らな行いや盗みを悔い改めなかった。」

前回、私たちは、火による天災が地上に下るのを見ましたが、9 章に出てくる災いは、さらに恐ろしいものです。悪霊どもが、人類を激しく攻撃してきます。現実は小説より奇なり、という言葉がありますが、まさにホーラー映画よりも、おぞましいことが襲いかかります。

1A 悔い改めない謎

しかし、それに関わらず、生き残っている人々は悔い改めようとしないのです。人々は、神の奇跡など起こりっこない、そんなことをよく信じられるな？と言いますが、私にとって、もっと信じられないのは、人々がそれ以上に、どんな不思議や奇跡を見たとしても、それでも信じないという、心の頑なさです。聖書は包み隠さず、心を頑なにする人々は、どんなことが起こっても強情を張り、ついに地獄の苦しみを味わっても、決して悔い改めないという現実を、明らかにしています。それでメッセージの題は、「頑なな心のミステリー」です。

1B 見聞きしても信じない者

1C 陰府で苦しむ金持ち

イエスが語られた、金持ちとラザロのことを思い出します。乞食のラザロも、金持ちも、死にました。金持ちが陰府で苦しんでいました。ラザロは、アブラハムの懐にいて慰められています。金持ちがアブラハムに、お願いしました。「ルカ 16:27-28 父よ。それではお願いですから、ラザロを私の家族に送ってください。28 私には兄弟が五人いますが、彼らまでこんな苦しい場所に来ることがないように、彼らに警告してください。」けれども、アブラハムは、モーセと預言者がいるから、それに聞くがよいと言いました。神のことばを聞いて、悔い改めたら良いということです。けれども、金持ちは言います。「16:30 いいえ、父アブラハムよ。もし、死んだ者たちの中から、だれかが彼らのところに行けば、彼らは悔い改めるでしょう。」ラザロを生き返らせたら、それを見たら、必ず信じる。悔い改めますよ、と訴えます。けれども、アブラハムは答えるのです。「16:31 モーセと預言者たちに耳を傾けないのなら、たとえ、だれかが死人の中から生き返っても、彼らは聞き入れはしない。」生き返ったとしても、神のことばに耳を傾けないのなら、聞き入れはしないと言うのです。

2C ラザロを見ても信じない者たち

本当ですか？と思うでしょう。ヨハネ 11 章を見てください。同じラザロという名前の人が出てきます。マルタとマリアの兄弟です。彼は死に、四日も経ちました。イエスが生き返らせました。それで、多くのユダヤ人が信じました。ところが、です。「11:46 しかし、何人かはパリサイ人のところに行って、イエスがなさったことを伝えた。」信じないのです！多くの人が、神は見えないから信じない、と言います。では、見たら信じるのか？というと違うのです。

2B 神の慈しみと寛容の悔り

見たら悔い改めるのではないのです。悔い改めは、どのようにして起こるのでしょうか？それは、人の心が、神のいつくしみと寛容に触れることなのです。「ロマ 2:4-5 それとも、神のいつくしみ深さがあなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かないつくしみと忍耐と寛容を軽んじているのですか。5 あなたは、頑なで悔い改める心がないために、神の正しいさばきが現れる御怒りの日の怒りを、自分のために蓄えています。」

1C 不信の罪

人が悔い改める時に必要なこと、死活的なこと、また根本的なことがあります。それは、神が良いお方、いつくしみ深い方だということです。そこへの信頼があるからこそ、思い直し、罪から離れ、神に立ち返ろうとするのです。悔い改めは、言ってみれば相手への信頼です。自分が罪を神に犯したというとき、そこに神の人格を認めています。人に傷をつけて、申し訳ない思いになるのと同じように、神がおられて、この方の人格を傷つけたことを知るからです。そして、この方はそれでも憐れみ深い方なのだということを知っているからこそ、悔い改められます。

そこを、悪魔は嘘をついて、神は意地悪なのだとそそのかしたのです。蛇がエバに対して、「創3:5 それを食べるそのとき、目が開かれて、あなたがたが神のようになって善悪を知る者となることを、神は知っているのです。」と言いました。神だけが善悪を知る方ですが、それを自分だけ占有して、他には与えないと意地悪をしていると思い込ませました。タラントの譬えでも、一タラントの者が、なぜ地中に隠したのかを主人に問われると、「マタ 25:24 ご主人様。あなた様は蒔かなかったところから刈り取り、散らさなかったところからかき集める、厳しい方だと分かっていました。」と言っています。神の慈しみ深さと気前の良さに信頼を置いていなかったのです。

2C 強情を張る心

こうして、人は神に対して心を閉ざします。そして閉ざした心は、なかなか開くことはできません。エジプトのファラオのことを思い出してください。彼の心がだんだん、頑なになっていくのを観察できます。初めは、ヘブル人の神、主のことなど知らないと言いました。それは、無理もないかもしれません。それでアロンの杖を蛇にしました。けれども、ファラオは、自分の呪術者の杖が蛇に代わったのを見て、心を頑なにしました。しかし、主は、アロンの杖の蛇を、呪術者の杖の蛇を呑み込みようにされました。自分の神々よりも、イスラエルの神のほうが強いことを示されたのに、それでも頑なに拒みました。

それでナイル川を血に変わったのを見ても、信じませんでした。呪術者たちも、水を血に変えて見せたからです。それで主は、ナイル川から蛙を出させて、ファラオの家の中にまでいっぱいにしました。それで、イスラエルの民を去らせると言ったのですが、蛙が死に絶え、その処理が終わって、せいせいしたら心を頑なにしたのです。もう、見ているからという理由で信じていないのではないのです。ただ平穏が戻れば、元の木阿弥でした。喉元過ぎれば、熱さも忘れるということです。

3C 固定される心

そしてついに、呪術者たちも奇跡を真似できなくなり、ついに、彼ら自身が膿の災いの時に倒れてしまいました。それでもファラオは心を頑なにしていたのです。そうしたら、ついに「主がファラオの心を頑なにされた」という言葉が出てくるのです（9:12）！これは、彼が悔い改めたい心があるのに、主が無理やり頑なにしたということではないのです。彼が頑なにしているから、その頑なさ

のままにしておかれる、ということです。そして、その頑なさの中にあっても、主がご自身のわざを行われ、栄光を現すということです。

同じような心に、イエスが地上におられた時のユダヤ人指導者たちも、陥ってしまいました。「ヨハ 12:37 イエスがこれほど多くのしるしを彼らの目の前で行われたのに、彼らはイエスを信じなかった。」とあります。続けてヨハネは、こうまとめます。「12:39 イザヤはまた次のように言っているので、彼らは信じることができなかったのである。」しるしを見たのに、何度も何度も信じませんでした。すると、ついに信じることができなくなったのです。ちょうど、ギターを弾く指が、初めて弦で痛かったのに、ついにタコができて、痛くなくなるのと同じように、心で拒み続けると、心が頑なになり、無感覚になって、信じることができなくなってしまいます。

3B 自ら定める滅び

信じられないのではなく、信じないことを選び続けているのです。そうやって、自ら滅びを招くことをしているのです。「ヨハ 3:18-19 御子を信じる者はさばかれない。信じない者はすでにさばかれている。神のひとり子の名を信じなかったからである。そのさばきとは、光が世に来ているのに、自分の行いが悪いために、人々が光よりも闇を愛したことである。」イエスを知ることは、自分が闇の中にいることが明らかにされる時です。そこで、その悪い行い、闇を愛する時に、イエスの名を信じないのです。ここの「愛する」は、なんとギリシア語のアガペーの動詞が使われています。アガペーとは、犠牲の愛です。どんなことをしても、自分を与える無私の愛です。つまり、闇を、どんな犠牲を払ってでも、自分を無にして愛することです。自分自身が滅んでしまうことが、明らかなのに、犠牲を払ってしまうことです。

2A 悪霊に仕える者

本文に戻りますと、20 節で「悔い改めて自分たちの手で造った物から離れるということをせず、悪霊どもや、金、銀、銅、石、木で造られた偶像、すなわち見ることも聞くことも歩くこともできないものを、拝み続けた。」とあります。

1B 悪魔に従う者たち

彼らは悪霊どもを拝んでいると言っています。このような心の頑なさの背後には、悪魔や悪霊どもの支配があります。「エペ 2:1-2 さて、あなたがたは自分の背きと罪の中に死んでいた者であり、かつては、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者、すなわち、不従順の子らの中に今も働いている霊に従って歩んでいました。」人は、自分は客観的であり、中立である主体性を持っていると信じています。だから神を信じない、仕えないと決めているのだとしています。けれども、真実は違います。神に歯向かっている悪魔の意のままになっているのだ、ということです。自分が神を認めなければ、それはすなわち、悪魔に服従しているということです。

2B　偶像礼拝

その中で、偶像を拝んでいるのです。

1C　神への侮り

偶像礼拝は、生ける神に対する侮りから始まります。神の造られたもの、神の力と永遠性が現れて、明らかなのに、その真理を拒みます。それで心が頑なになり、偶像を拝みます。先ほどの交読文を開いてみましょう。詩篇 115 篇です。2 節から読みます。

2 なぜ　国々は言うのか。「彼らの神は　いったいどこにいるのか」と。
3 私たちの神は　天におられ　その望むところをことごとく行われる。

神が目に見えないので、嘲っています。どこにいるのか？と。それに対して、はっきりと、天におられて、その望むところをことごとく行っているのだと答えています。そして、「では、あなたがたの信じているものは、何なのか？」と逆に問い直すのです。

4 彼らの偶像は銀や金。 人の手のわざにすぎない。
5 口があっても語れず　目があっても見えない。
6 耳があっても聞こえず　鼻があっても嗅げない。
7 手があってもさわれず　足があっても歩けない。
　喉があっても声をたてることができない。

生ける神と偶像との大きな違いは、これです。しばしば人々は、「神について、理解できないから信じない」というのがあります。私に言わせたら、「理解できたら、本物の神ではない」です。神は、自分の理解を越えているからこそ、信頼するに値するのです。礼拝するのに、自分のように目が見えない、口がきけない、耳が聞こえないものを礼拝するなど、実に愚かです。神は、目に見えませんが、私たちを見ておられます。祈りを聞いてくださいます。語ってくださいます。

2C　霊的盲目

8 これを造る者も　信頼する者もみな　これと同じ。

偶像礼拝の恐ろしいところは、ここです。自分よりも劣った存在を拝むことによって、自分自身の尊厳を引き落とし、そのようになってしまいます。無知になり、無感覚になってしまうのです。パウロが、こう説明しています。「ロマ　1:21-23　彼らは神を知っていながら、神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その鈍い心は暗くなったのです。彼らは、自分たちは知者であると主張しながら愚かになり、朽ちない神の栄光を、朽ちる人間や、鳥、獣、這うものに似たかたちと替えてしまいました。」

3B　悪い行い

そして本文には、「[21] また彼らは、自分たちが行っている殺人、魔術、淫らな行いや盗みを悔い改めなかった。」とあります。

1C　偶像の表象

偶像礼拝と、これらの忌まわしい行いが密接に結びついています。今、読みました、ロマ 1 章の箇所でも、続けてこう言っています。「ロマ 1:24-25 そこで神は、彼らをその心の欲望のままに汚れに引き渡されました。そのため、彼らは互いに自分たちのからだを辱めています。彼らは神の真理を偽りと取り替え、造り主の代わりに、造られた物を拝み、これに仕えました。造り主こそ、とこしえにほめたたえられる方です。アーメン。」

私たちが偶像を考える時に、今の日本の神社仏閣、そこでの参拝の姿を思い起こすと、理解が難しいかもしれません。もちろん、それは偶像礼拝ですが、当時、旧約時代にも、新約時代にも、偶像礼拝には、忌まわしい行いが伴っていました。それは逆にいうと、自分たちが忌まわしい行いをすることにおいて、それを良く表現している神々を拝んでいるからです。カナン人の慣わしでは、例えば幼児供養が行われ、幼児を家の壁に組み込むなどしました。もちろん、それは望まぬ妊娠をしているからです。ギリシアやローマ社会でも、忌まわしいことを神の名で行っていました。

今でこそ、そうした偶像礼拝と忌まわしい行いのつながりは、あまり見ないかもしれません。けれども、当時の人々は、正直だったのです。自分は確かに、これを拝んでいるとして、欲望を言い表していたのです。

今、自分はまともであると言っていながら、当時のいろいろな神々と変わらないものを拝んでいます。最近、ある学者が、自分と考えの合わない雑誌について、「徹底的に見下さないといけない。まともな人は」というようなことを言っていました。見下すことを、一つの責務として公に語っているのです。かつてカナン人は、これをバアルと呼んでいました。権力や知性の神です。自分が権力を持ち、そのプライドを保つために、自分の意見に反する人々を徹底的に見下しているのです。同じように、すべての人を損得で考えて、自分の利益のために役に立つか、立たないかで付き合い、何でもお金もうけに関わらせるのであれば、その人は、当時であればマモンを拝んでいます。富を拝んでいるのです。すべてのことが、いかに自分が利益を得るかに集中しています。その人は、富の神、マモンに仕えているのです。

2C　霊的自傷

この箇所において哀れなのは、仕えている悪霊が、自分たちを痛めつけていることです。悪霊どもを拝んでいるのですが、その悪霊どもが自分たちを苦しめ、殺戮していきました。自分を痛めつけているのに、むしろなおのこと、悪霊に仕えるのです。霊的な自傷行為とでもいえば良いでしょう。

こうした姿を、イザヤは次のように預言しています。「1:5-6 あなたがたは、反抗に反抗を重ねてなおも、どこを打たれようというのか。頭は残すところなく病み、心臓もすべて弱っている。足の裏から頭まで健全なところはなく、傷、打ち傷、生傷。絞り出してももらえず、包んでももらえず、油で和らげてももらえない。」

3A 主への立ち返り

私たちの主、イエスは、こうした哀れな私たちを憐れんでくださいます。そして、その傷を身代わりに受けてくださいました。私たちが癒されるためです。希望は、この憐れみ深い主を、見上げることであります。悔い改めとは、自分が罰せられるのを恐れて神を信じることではありません。これほどまでに、神が、キリストにあって愛してくださったことに信頼を置くことです。

主は、このように心を頑なにする者たちにも絶えず、手を伸ばしてくださり、心を新たに変えてくださるご計画を持っています。「Ⅱコリ 3:16-18 しかし、人が主に立ち返るなら、いつでもその覆いは除かれます。17 主は御霊です。そして、主の御霊がおられるところには自由があります。18 私たちはみな、覆いを取り除かれた顔に、鏡のように主の栄光を映しつつ、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられていきます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。」

1B 覆いの取り除き

主に立ち返ると、主が、真理を見えなくさせている覆いを取り除けてくださいます。自分では見えないものを、神が見えるようにさせてくださいます。そして、御霊によって自由にされます。

2B 神のかたち

そして大事なのが、「主と同じかたちに姿を変えられていきます」とあるところです。私たちは、目に見えるかたち、偶像を拝む罪を犯してしまいます。しかし、そんなことしないでください。神を仰ぎ見て、神の霊が働かれると、あなた自身が神のかたちに変えられます。目に見えない神が、目に見えるかたちで、私たちのうちに現れるのです。人が造ったかたちを拝むのではなく、自分自身が神のかたち、神の像になります。